

西の作家が死んだ

平 維茂

過酷な猛暑の夏が過ぎたあとに待ち焦がれた秋がきた。

これで暫くは快適に過ごせると思いきや、売れない物書き仲間の永須氏からメールが届いた。西の作家が八月の末に亡くなり、葬儀は家族だけの密葬で済ませていたとの知らせであった。湘南のリゾートマンションに一人優雅に暮らす我々売れない物書き集団の最長老、津嶋藍子女史。京城生まれであるが、一歳からの大阪育ち。生粋のいとはんで、我々は西の作家と呼び親しんできた。年齢は既に百歳を越えていた筈である。都内の会合には杖を片手に電車を乗り継ぎ一人で湘南から出てくる。会の後はカラオケで福山雅治の曲を歌うのが常であった。いつも会う度に「来月は死んでいくから」と数十年訊かされ続けた。頭脳明晰、いくら歳を重ねても一向に衰えぬ記憶力、的確な作品書評。昭和十六年から二十歳で神戸の婦人雑誌社に編集者として勤務し、織田作之助など名立たる文豪と交流を交わし、自らも小説を書き、関西ではそこそこ原稿料の稼げる物書きとなっていた。しかし結婚をきに上京すると、東京の水が合

わなかったのか、プロ作家としての意欲が失せてしまい売れない物書きの仲間となっていた。私などは同じ大阪育ちと云うことで特に親しく指導を受けた。同人誌に作品を発表した時は必ず電話で丁寧なアドバイスを頂いた。

「感性を磨きなはれや。フランス文学は参考になりまっさかい、ル・クレジオなど読んでみたらどうですか……等々」

早速、ル・クレジオの作品を読んだ。それも立て続けに四作も。ドグラ・マグラを読んだ時でさえ、精神に異常を来たさなかったが、ル・クレジオの作品は読んでいて危ないと感じた。なにはともあれ昭和を生抜いた文壇の生き字引、大先輩である。この夏の猛暑を乗り切ることが出来ず、遂に逝ってしまった。百か日を過ぎた頃にも売れない物書きの仲間でお別れの会をするかと想いつつ、寝入ったころにたたき起こされた。

「平野さん……」ベッドの傍に眉目麗しき……ではないが、オカッパ頭の二十歳そこそこの若い女性が立って私の顔を見下ろしているではないか。ストーカーか？ 若い女性のストーカーなら大歓迎である。しかし、何処かで見ただ顔のような……。飛び起きて女性の顔をまじまじと見たが、誰だか思い出せない。「どちらさんですか？」「平野さん、私よ……」「えっ……、私……？」「津嶋よ、津嶋藍子」ストーカーではなかった。失望が先に立った。すると幽霊？

ドキッ！ いや、今はジェジェエか……、少しは驚かなければ。「津嶋さん、何かこの世に未練でもお有りですか……？」 それにそんな若いお姿で……」「この世に百年以上も居たから未練なんてもんおまへんがな。この姿可愛いのでっしやる。うっかり死んだ時の姿そのまままで亭主に会いに行ったら何処のババアだって云われたので亭主と知り合った頃の姿にしたの」確かにババアより若いのに越したことはないのである。「ご主人、津嶋さんに再会できて喜んでしょ」「とんでもないわよ、あの人、生きている間、長らく私に介護させておいて、先に逝つたらもうあの世で女こしらえているのよ。腹が立つのなんのつて」彼岸でも此岸でも男女関係は同じである。「あの……、ご主人の愚痴を云いに出てこられたんでっか」「いやいや、違いますねん。大事な話がおますんや」「大事な話と云いますと……」「実は、織田作に会いましたか？」「もちろんですわ。津嶋さんのこと憶えてはりましたか？」「もちろんですわ。それでなあ、平野さんは織田作の全作品読破してましたやろ。土曜夫人が絶筆で残念がってましたな。土曜夫人の続き知りたいことおまへんか？」「そら知りとおますわ。東京編が始まるところで絶筆となつてしまいましたからな」「彼、土曜夫人の続編を発表したいらしいの。それで相談なんやけど、原稿貰ってくるさかい、平野さんが土曜夫人として発表してくれはらへんやろか」「ええ……

私がですか」「そうよ。そうすれば、これがきつかけで平野さんもきつと原稿料の取れる物書きの仲間に入れまつせ」「そうでっしやるか……？」

翌日の夜中、西の作家は再び姿を現し、織田作の原稿を見せた。「津嶋さん、この原稿は私には読まへんわ」あの世の原稿はこの世の者には読めなかった。「困りましたな。そしたら私が読んでいくさかい筆記してくれはりますか。筆記と云つてもパソコンで打つだけやろさかい。でも、私も忙しいさかいな、一日に原稿用紙二十枚くらいにしておくれやす」「全部で何枚おますんや」「三百五十枚」「それやったら十八日は掛かりまつせ」「週休二日で頼みますわ」「津嶋さん、これからはいつも夜中に出てこられるんでっか」「そうよ。私達はこの世では昼間はぼやけて見えづらいさかいな。夜の方が鮮明に見えまつしやる」「ところで他の人の姿では出てこれまへんのか。例えば女優さんとか、グラビアアイドルとか……」「そんなの無理や。精々、若いときの姿くらいなものですわ。あんたはん、何を考えてまんのや」「いや、あの、その、べつに……」「土曜夫人が終われば、他の作家さんからの話も有るさかい。忙しくなりまつせ。せいぜい気張つてや」

これってゴーストの作家の代筆……？　これが本当のゴーストライター……？